

ヴォルテールとカラス事件

Voltaire et l'affaire Calas

小林善彦

Yoshiniko Kobayashi

動き出すヴォルテール

四散したカラスの家族

ヴォルテールの援助

再審査への努力

名誉回復

その後の人びと

1 動き出すヴォルテール

トゥルーズに起ったカラス事件（一七六一年十月十三日）と、ジャン・カラスの処刑（一七六二年三月九日⁽¹⁾）の知らせは、三月の末頃、新教徒の商人ドミニク・オディベール Dominique Audibert によってはじめてヴォルテールの耳に入った。この人はジャン・カラスの処刑の数日後トゥルーズを訪れ、その後直接ジュネーヴにやって

来てヴォルテールに会い、この恐ろしい事件の一部始終と、その矛盾した判決の生々しい事情とを伝えたのであった。オディベールはジャン・カラスの無実を信じていた。というのはトゥルーズの高等法院の判事たちの中にさえ、カラスの有罪に確信を持っていないものがあつたからである。それにカラスの父親に対する判決と、他の被告たちに対する判決とが明らかに矛盾しているということ自体、判事たちの動揺ぶりを物語っているからである。オディベールはこのカルヴィニスムの町に到着するとただちに、宗教上の理由でフランスからここに亡命していた人たちに迎えられ、その人たちを通してヴォルテールに会うことができたのであった。

当然、ヴォルテールはこの事件の物語を聞いて激しいショックを受けた。彼の想像の中に事件はあたかも地獄絵図のごとく現われ、楽しみのさ中にあつても彼はそれを思い出し、夜の眠りをもかき乱すほどであつたという。ヴォルテールは早速秘書のワニエール *Wagnière* を呼んで、手紙を口述するのであつた。最初彼はオディベールの確信にもかかわらず、まだ決定的にカラスの無罪を信ずるには至っていない。父親の狂信が息子を殺したのであるうか。それともまた、フランスでもっとも権威ある法廷の裁判官たちが、十三人のうち八人も、無実な人間を車裂きの刑に処するのに賛成したのであるうか。いづれにせよヴォルテールは、そこに恐るべき狂信の働らきを見たのであつた。最初の十日あまりの間、彼の心がどのように微妙に揺れ動いていたか。それをわれわれは以下に示す幾通かの彼の書簡の抜粋から、読みとることができるのである。

ここでヴォルテールは、はじめ事件をユグノーの狂信のなせるわざだと思つた。しかしながら日が経つにつれ、またさまざまな情報が彼の耳に入ってくるにつれて、彼の心の中には疑いが湧き起ってくる。そしてたとえ狂信がいづれの側にあるうとも、真相を明らかにしようという姿勢になるのである。

一七六二年三月二十二日、ル・ボー Le Bault 宛。

「あなたは恐らく、息子を絞殺したために、トゥルーズの高等法院から車裂きに処せられたユグノーのことを、お聞きになったでしょう。しかしながらこの聖なる改革派の男は、良い行ないをしたと信じていたのです。というのは彼の息子はカトリックになろうとしていたので、背教を防ごうというわけなのでした。彼は自分の息子を神に犠牲として捧げ、そしてアブラハムよりもずっとすぐれていると考えていたのです。…われわれはたいした価値のあるものではありません。しかしユグノーたちは、われわれよりもっと劣るものなのです。」⁽²⁾

三月二十五日、フィオ・ド・ラ・マルシエ Fyot de La Marche 宛。

「わたしはその（カラス事件の）ため、われを忘れた状態です。わたしは人間として、またいささかは哲学者として、このことに関心を持ちます。わたしはどちらの側に恐ろしい狂信があるのかが知りたいのです。ラングドックの地方長官はバりに居ります。彼はこの恐るべき事件をよく知っているのです。どうかお願いですから、わたしがどう考えるべきかを知らせて下さい。」⁽³⁾

三月二十五日、ベルニス枢機卿 Cardinal de Bennis 宛。

「自分の息子の首を吊ったかどで、車裂きにされたカラスの恐ろしい事件について、わたしがどう考えるべきかを、どうか閣下に教えていただきたいと思えます。というのは、当地では彼がまったく無罪であり、死にのぞんで神をその証人にしたといわれているのです。裁判官のうち三人が、この判決に反対だったともいわれております。この事件はわたしの気にかかり、楽しみの中にあってもわたしは悲しくなり、楽しみも台なしになるのです。われわれはトゥルーズの高等法院を、あるいはまた新教徒たちを、恐怖の眼で見なければならぬのでしょうか。」⁽⁴⁾

三月二十七日、ダルジャンタル伯 *comte d'Argental* 宛。

「……カラスが有罪であっても、人間性の名誉を汚すこの恐ろしい事件の情報を、ショワズール伯にたのんで手に入れて下さらないでしょうか。どちらかの側にたしかに恐ろしい狂信があります。そして真実をもっと究めるのはよいことなのです。」⁽⁵⁾

以上のようにつきつきに手紙を書いているうちにも、おそらくヴォルテールのもとには、刻々と新らしい情報が入ってきていたのであろう。彼の心の中の疑いは、やがて徐々にカラスの無罪を信ずる方向へと傾いて行く。それでは彼は、何故にカラス事件にこれほどの関心を寄せたのであろうか。それについて彼自身、三月二十七日附のダルジャンタルへの手紙の中で、つぎのようにのべている。

「車裂きにされたカラスに、わたしが何故そんなに関心を持つのかと、あなたはおそらくお尋ねになるでしょう。それはわたしが人間だからです。そして外国の人たちがみな腹を立てているのを見るからなのです。」⁽⁶⁾

一七六二年九月三日、ベルニス枢機卿宛。

「あなたは何故わたしがこの裁判を引き受けたのか、とお尋ねなるでしょう。その理由は、引き受けるものがあったし、それに人びとはあまりにも、他人の不幸に無関心すぎるからなのです。」⁽⁷⁾

またずっと後になって、一七六五三月一日、ダミラヴィル *Damillaville* 宛の手紙では、ヴォルテールはつきぎうにいうのである。

「この奇妙な事件に関してラングドックに手紙を書いたところ、カトリックもプロテスタントも、カラスの犯罪を疑ってはならぬと答えてきた時、わたしはなんと驚いたことだろう。わたしはそれに少しもひるまなかった。わ

たしはこの地方を治めていた人たち、隣接した地方の支配者たちや国務大臣たちにあえて手紙を書いてみた。するとみんなはわたしがそのような悪い事件には、少しも首をつっこまぬようにと忠告してきたのである。みんながわたしを批難した。そこでわたしは固執したのである。⁽⁸⁾」

ところでそうしているうちに、決心のつきかねていたヴォルテールのもとに、彼の立場をはっきりさせるのをうながすような何等かの情報が入つたのである。四月四日になると彼は、ダミラヴィルにつきのような手紙を書き、それが百科全書派の人たちに回覧されることを望んだのであった。

「皆さん、トゥルーズの裁判官たちが、この上もなく無実な人間を車裂きにしたことはたしかです。ほとんどラングドック全体がそのため、恐怖におののいております。われわれを憎み、われわれと戦っている外国の国民たちはいきり立っています。サン・バルテルミーの日からこのかた、これほど人間性の名誉を汚した日はありませんでした。叫び声を上げるのです。そして人びとに叫び声を上げさせるのです。⁽⁶⁾」

ヴォルテールがこの事件において、カラス無罪の態度をはっきりと示した、これが最初の宣言である。その上まさにその頃、彼にとつてさらに真実を追求するための、重要な機会が訪れたのである。それはカラスの末の息子のドナ Donat が、家族の悲劇的な不幸を知ってニームの徒弟奉公先を飛び出し、ジュネーヴに到着したことであった。ヴォルテールはただちにフェルネー Ferney の館を出て、スイス領レ・デルイス Les Délices にあった彼の館に移り、ここで危険な長途の旅を続けたドナに会って、彼にいろいろと尋ねることができたのであった。後になつてヴォルテールは、この若いカラスとの出会いの時を、つぎのように思い出している。

「わたしはその若いカラスを、わたしの家へやって来させた。わたしは彼の故郷がしばしば生み出した狂信者に

会うのだと予想していた。ところがわたしが見たのは、純でうぶで、この上もなく和やかで興味のある顔立ちの子供であった。そして彼はわたしに話しながらも、涙をこらえようとして、空しい努力をしているのであった。⁽¹⁰⁾

ドナ・カラスはレ・デリスの館にしばらく滞在する。その間ヴォルテールは十分に彼を観察し、彼の陳述をあらゆる角度から検討し、彼の家族のこと、フィラチエ街十六番地での生活のことなどを、細かい点に至るまで聞きだしたのであった。ドナの誠実はヴォルテールの心を大いに動かした。加うるにヴォルテールは、かつてトゥルーズでカラスの家に滞在したことのあるジュネーヴの商人を二人見つけ出し、この方面からもカラスの家族について知ることがあった。その結果彼は、カラス家の人たちがこのような不寛容かつ残忍な罪を犯すことは、有り得ないと信ずるに至ったのである。そして今後の彼は、この考えを決して変えはしないであろう。

けれどもここに興味深いのは、ヴォルテールが作戦上、相手によって調子を変えることである。すなわち彼はすでにカラスの無罪を信じておりながらも、相手と場合によっては自分も知らないような様子をして、念を入れて真実を確かめようとするのである。ここにわれわれは歴史家ヴォルテールと、策略家ヴォルテールの二つの顔を見出すことができる。例えば同じ五月十五日附の二通の手紙を見よう。

ベルニス枢機卿に宛てては、

「もしも閣下に御迷惑でなく、真実を知ることがお出来になるならば、わたしの好奇心にとって大変有難いことと存じます。閣下はトゥルーズから送られた覚え書をわたしに送って下さることが出来るでしょう。もちろんわたしは、それを閣下からいただいたとは申しません。ラングドックからの手紙は、すべてお互いに矛盾しておりま⁽¹¹⁾す。それはわたしには解くことのできぬ混沌なのです。」

一方ダルジャンタルには、

「……トウルーズの高等法院は恐ろしい未熟な失敗をやったことを知って、真実が人に知られるのを邪魔しているのです。」⁽¹²⁾

ひとたび決心を固めたヴォルテールは、ただちにジュネーヴで彼に協力する人たちを探して秘密の委員会を作る。その顔ぶれは第一にフィリップ・ドブリュ Philippe Debrus。この人はかつてカラス家に滞在したことのあるジュネーヴの二人の商人のうちの一人で、ドナ・カラスの陳述をヴォルテールとともに確認した人である。第二に、進歩的な思想の牧師ムルトウ Moutou。第三に、かつて荒野の教会にも参加した⁽¹³⁾ことのある弁護士で、その後ジュネーヴに亡命してきたヴェゴブル Végobre。最後に、ジュネーヴの銀行家のカタラ Cathala。この人は主として資金面でよき相談相手となった。以上の顔ぶれにヴォルテールの友人で法律家のトロンシャン Tronchin が時として加わり、一同はヴォルテールのフェルネーの館、またはレ・デルリスの館に集まっては、相談を重ねるのであった。

彼等が最初に決定した方針は、カラス夫人と連絡をとることであった。そこで彼等は当時モントルバンにいた彼女に対して、その夫の無罪を「神の名にかけて」誓う用意があるかどうかを尋ねるとともに、モントルバンに住むある新教徒に対して、もう一度事件の調査を依頼したのであった。

ジュネーヴからの連絡を受けたカラス夫人は、一七六二年六月十五日付で長文の手紙を書く。この書簡の中で彼女は、事件の当日ゴベール・ラヴェスがトウルーズに到着したことからはじめて、マルク・アントワーンの死体の発見や、悲嘆にくれる家族の有様を描いている。この不幸な物語は後にヴォルテールが手を加え「カラス未亡人の

ある書簡の抜粋」として発表するのであるが、読むものをして強い誠実の印象を与えらるゝとにも、事件の貴重な記録として、今後多くの人たちに読まれるようになるであらう。⁽¹⁴⁾

一方ヴォルテールはこの事件について、パリにいる彼の多くの友人、サロンの人たち、宮廷の人たちの目を覚ますことが必要と考えた。そこで彼の手からはパリに向つて、手紙が奔流の如く流れ出すのであった。そしてそれらの手紙は、サロンや人びとの集まる場所で紹介され、朗読されたのである。「わたしはこの事件を死なないかぎり放棄しない。」ヴォルテールはその頃こう⁽¹⁵⁾いつている。やがてルイ十五世の宮廷でもっとも勢力のある大臣だったシヨワズール公 *duc de Choiseul*、および国王の寵愛厚かったポンパドゥール夫人 *M^{ne} de Pompadour* の二人は、国王の注意をカラス事件へ向けようと努めるに至つた。八月二十七日ポンパドゥール夫人がさる貴族に向つて書いた手紙は、夫人がカラス事件の物語から、いかに強い印象を受けたかを想像させるのである。

「公爵様、あなたのおっしゃる通り、あの不幸なカラスの事件は戦慄すべきものです。彼がユグノーに生れたことは残念ですが、といって彼を街道の盗人あつかいにすべきではありませんでした。彼は告発されたような犯罪を犯したとは思われません。そのようなことは自然ではありません。しかしながら彼は死に、その家族は名誉を傷つけられ、そして裁判官たちは後悔しようとはしていません。国王のやさしい御心は、この奇怪な事件の物語りにひどく苦しまれ、フランス全体が復讐を叫んでおります。この哀れな男の復讐は行なわれるでしょうが、彼は戻つて来ないでしょう。あのトゥルーズの人たちは激しやすく、彼等は良きキリスト教徒として必要な以上に、自己流の宗教を持っているのです。神さまが彼等を改めさせ、もつと人間らしくさせて下さいますように。」⁽¹⁶⁾

かくしてヴォルテールの運動は、好調な滑り出しを示したのであった。けれどもその前途は必ずしも、予想する

如く容易ではなかつたのである。

2 四散したカラスの家族

ここでわれわれはもう一度、ジャン・カラス処刑後の彼の家族の人たちに眼を向けてみよう。

まずカラス夫人と二人と娘は、トゥルーズを去つて一度はモントーバンに到着したものの、一七六二年五月二十八日の未明、警官によつて急襲され、ナネットとロジューヌの二人の娘はここで逮捕されて、それぞれ別の修道院に入れられ、カラス夫人だけが残されたのであつた。彼女は友人たちから身を隠すようにとすめられたが、その忠告には従わず、モントーバンに留まる。そこへジュネーヴの秘密の委員会から、事件の詳細を問い合わせる手紙がくる。⁽¹⁾彼女がこれに答えて「カラス未亡人のある書簡」を書いたことはすでにのべた。

はじめのうちこの彼女を説いて隠退の地からパリへ行かせ、人びとに事件を訴えようという決心をさせるのは、仲々容易なことではなかつた。というのは、彼女の行動にはたえず監視の眼が光っているかも知れず、うっかりした行動に出れば、あべこべに「封印書」を發動される恐れがあつたからである。加うるに彼女は、自分の軽率な行為によつて、トゥルーズにいる子供たちの身の上に、さらに不幸がかぶさるのを恐れていたのであつた。

しかしながら、快楽のみを追い求め、熱のさめやすいパリの人々には、この悲劇の生きた証拠を眼の前に示すことが必要であつた。そして彼女もまたようやく、それが自分の義務であることを理解するに至つたのである。そこで彼女はとりあえず「息子ドナカラスより母親カラス未亡人への書簡」⁽²⁾（一七六二年六月二十二日付）をたずさえてパリに上る。この手紙は実をいえばヴォルテールが書いたものであつて、トゥルーズの下した二つの判決の間の

矛盾を、鋭く批判した文章である。

カラス夫人がパリに着いたのは六月末のこのとであつた。その時悲しみで心の沈みがちな彼女を、はるか遠くから援助したのがヴォルテールである。彼は夫人を銀行家のデュフォー Dufour やマレ Mallet の家に泊らせ、同時に彼女の到着を友人のダルジャンタルに知らせて、⁽³⁾ 弁護士のマリエット Mariette に事件の弁護を依頼したのであつた。⁽⁴⁾

つぎに三男のピエールはその後どうなつたのだろうか。彼は終身追放ということになり、三月二十三日には形式的にトゥルーズの町まで連れて行かれたが、また市内に連れ戻されて、ドミニコ派の修道院に監禁されたのであつた。というのは彼はさきに父親の痛ましい運命を知つて、新教を放棄し改宗したのであつたが、信用されていなかった。そこでこの修道院の中で「洗脳」され、教育されたのである。しかし彼は四ヶ月あまりたった七月四日には、ここを脱出してジュネーヴに逃れ、弟のドナと合流する。脱出にあたって彼は、ブルジュ神父につきのような皮肉をこめた手紙を残したのであつた。

「わたしはあなたの御親切に感謝いたします。わたしは自分の疑いと心の乱れとについて、しばしばあなたにお話いたしました。しかしそれはほんの一部にすぎなかつたのです。そのことはわたしの脱走によつてもお分りでしょう。わたしはそれほど当惑のうちに生きていたので、もしも神の恩寵によつて支えられなかつたならば、わたしの不幸な兄がしたように、自分で自分の首を吊つたに違いありません。⁽⁵⁾」

ピエールは少なくとも七月二十六日か、またはそれ以前にジュネーヴに着き、フェルネーでヴォルテールに会つて⁽⁶⁾いる。ここでピエールはヴォルテールから、さきにドナが受けたのと同じように事件の模様を詳しく尋ねられた

のであった。ピエールこそは事件の真実を知っている人間だった。というのは兄のマルク・アントワーンが首を吊った現場を、最初に見たのは彼であり、投獄され裁判を受け、ジャン・カラスの処刑に至るまで、すべての事情に通じている点で、彼に勝るものはなかったからである。ピエールに対してヴォルテールは、あくまでも冷静な批判精神を失なわずに、事実と証拠をたしかめるといふ態度をとった。だがその結果として、彼はますますカラスの無罪を確信するようになったのである。翌年の一月三十日、ヴォルテールはつぎのような手紙を書いている。

「兄弟殺しの罪を問われ、父親が有罪だとすれば疑う余地もなく有罪なはずのピエール・カラスが、わたしの土地のすぐ近くに住んでいます。わたしは幾度も彼に会いました。最初わたしは警戒していました。しかし四ヶ月の間、わたしが彼の行為と言葉とをうかがわせてみたところ、それはこの上もなく純情な無実と、誠実な悲しみを示しているのです。」

一方、モントーバンで捕えられ、トゥルーズへ連れ戻され、別々に修道院へ入れられた、ロジヌとナネットの二人の娘はどうなったであろうか。まづ姉のロジヌについては、修道院に入れられた彼女が、そこでいかなる経験をしたかについては、今日ではなにも記録が残されていない。しかし妹のナネットについては、彼女が入った「聖母訪問会」La Visitationの修道院で、修道女アンヌ・ジュリー・フレーズ Anne-Julie Fraiseのもとに、かなり幸福な生活を送ったであろうと推測することができる。というのはロジヌとナネットは二人とも、この年の十二月には釈放されてパリに向うのであるが、その後もさきの修道女がナネットに宛てて書いた四十通の書簡が現存しているからである。この書簡はカラス事件の陰惨な物語の中にあつて、きわめて稀な幸福にあふれた文書であつて、あたかも沙漠の中にあつて新鮮なオアシスを見るが如き感を、読む人に与えるものなのである。

修道女はナネットに宛てた書簡の中で、その後の修道院の日常生活などを、こまごまと愛情をもって語り、事件が教会の最大の敵ヴォルテールによって弁護されているのを、深く残念に思いながらも、なおカラス家には心から同情する味方となり、時には高等法院の判事たちに対してさえ、軽蔑の気持を明らかに示すのであった。そればかりではない。時の大法官ギヨーム・ド・ラモignon、Guillaume de Lamoignon, *chancelier* の義理の息子で国王顧問官をしている人と、この修道女は縁がながつていた。そこで彼女はこの顧問官に宛てて、ナネットの推薦状を書いている。なおカラスの二人の娘が十二月に修道院から釈放されたのも、ヴォルテールの間接的な働きかけによるものであったが、しかし彼女たちはパリへ行っても、母親といっしょに住まないという条件で、やっと釈放されたことをつけ加えておきたい。

最後にゴベール・ラヴェス。彼は明らかにカラス家の人たちと共同歩調をとらない方が有利であった。しかしこの青年はカラス夫人のすぐ後からパリへやって来て、用心のため変名を使って人に知られないようにするのであった。トゥルーズの高等法院に關係している弁護士の彼の父親は、自分の息子が公然とカラス家の人たちといっしょになって、高等法院を批難するのを恐れ、ゴベールがこれ以上事件にまきこれないように、引き離そうとつとめた。だがラヴェス氏のこの努力にもかかわらず、ゴベールはやがてポワソニエール街 *rue Poissonniere* のカラス夫人と同じ屋根の下に暮し、彼女の息子のようになって困難をともし、有力者たちを訪問しては、事件を世の人たちに訴えはじめた。

一七六二年七月十四日、ヴォルテールはダルジャンタルに、つぎのような手紙を送っている。

「弁護士ラヴェスの息子はパリに隠れております、トゥルーズの高等法院と問題を起すのを心配する彼の不幸な

父親は、自分の息子が高等法院と派手に渡り合ひのを恐れております。そのような破廉恥な心配に対して、この青年を励ますために、出来るだけの親切を払ってや⁽¹⁾って下さい。」

この仲間にはやがて、ピエールもジュネーヴからやって来て加わる。また女中のジャンヌ・ヴィギエは、パリへ旅行するにはあまりにも貧しく、依然としてトゥルーズに留まるが、ずっと後になって、一七六四年六月にパリに向って出発するであろう、こうしてかつての被告たちの間には、パリに集って正義を獲得しようという機運が、そろそろ芽ばえていたのであった。そして彼等の後には、はるか遠くのジュネーヴから、全面的援助を惜しまぬヴォルテールがいたのである。

3 ヴォルテールの援助

カラス事件を見て、そこに傾きかかった絶対王制下の政治を認め、社会制度そのものを原理的に根本的に分析し、批判するというような仕事なら、ヴォルテールよりもむしろルソーの得意とするところであろう。しかしながら不正に虐げられた人、とくに宗教的狂信の犠牲者を見てその境遇に同情し、世論に訴えて改革を要求するという点では、ヴォルテールの方が能力があった。ヴォルテールの長大な書簡、数多くのパンフレットなどを見れば、とくにその感を強くするであろう。彼はまた、正義を獲得するのは世論の力なのだということを知っていた、おそらく数少ない先駆者の一人であろう。「われわれは、公衆の叫びが最上の方法であると信じています」といった彼は、カラス事件をたえず世間の注意にさらし、同じ話を一千回も繰り返すことが必要だと考えていたのである⁽¹⁾。

ヴォルテールが正義を主張するに当って、世論に訴えるという方法を重視したことは注目すべきであるが、そう

いった意図のもとに発表されたものの中でも、一読に値いするのは、一七六二年六月末に出版された「カラスの死」とトゥルーズで下された判決に関する資料⁽²⁾である。これはさききのべた二つの書簡、すなわち「カラス未亡人のある書簡の抜粋」（一七六二年五月十五日付）および「息子ドナ・カラスより母親カラス未亡人への書簡」（同年六月二十二日付）の二つより成っていた。その後この「資料」には「父、母、および兄弟のためのドナ・カラスの覚え書⁽³⁾」（七月二十二日付）および「ビエール・カラスの陳述⁽⁴⁾」（七月二十三日付）の二つがつけ加えられる。その内容をここで簡単に紹介すれば、「覚え書」の方は、新教徒もまた世間の批難と偏見とに反して、国王に忠誠なる臣下であることをのべてから、事件の詳細を物語り、それに対して下された二つの判決がお互いに矛盾していることをついたものである。また「陳述」の方は事件のいきさつを詳しく物語ることにより、証拠としてこれを世の人に示すことを目的とするものであった。

これとは別に同じ年の八月、世間の注目をカラス事件に集めようとしてヴォルテールが出版したのが「エリザベス・カニングとカラスの物語⁽⁵⁾」である。エリザベス・カニングの事件というのは、一七五三年英国で起ったつぎのような事件である。

エリザベスという娘が、一ヶ月ほど行方不明になった後、やせほそり取り乱した姿で家に戻ってくる。彼女は盗賊にさらわれて田舎の家に連れて行かれ、水とパンだけしか与えられずに、売春を強要されたと訴えるのであった。そこで彼女の申し立てにしたがって、その田舎の家が急襲され、その家にいた九人の人たちが残らず警察に捕えられる。彼等の有罪がまさに決定的になろうという時、ラムゼーという人が現われて、被告たちの無実を弁護し、エリザベスが姿を消していたのは、実は子供ができたのを、他所で産むためであったことを明らかにする。そ

の結果被告たちは救われたのであった。

ヴォルテールは英国に起つたこの事件をフランスに紹介し、つぎにカラス事件をここでも詳しく紹介することによって、英仏両国における裁判を比較し、英国の裁判制度の方がすぐれていることを啓蒙しようとしたのである。例えばカニング事件を紹介する文章の中で、英国の制度を賞讃しながら、彼はつぎのようにのべている。

「幸い英国では、いかなる訴訟も秘密ではない。なぜならば罪に対する罰は、人びとに対する公共の教育のためにあるのであって、個人的な復讐のためではないからである。すべての尋問は公開で行なわれ、興味ある訴訟はすべて、新聞に印刷されるのである。」

以上のごとくヴォルテールは、あるいは「資料」の出版により、あるいは作品を書くことにより、みづから啓蒙活動を行なつたのであるが、同時に事件再審査の請願をするために、パリにいる三人の有能な弁護士に協力を依頼したのであった。その三人とはピエール・マリエット Pierre Mariette エリ・ド・ホーモン Elie de Beaumont そしてロワズ・ド・モレオン Loyseau de Mauléon の三人である。ヴォルテールはすでに一七六二年六月十一日には、マリエット宛に事件依頼の書簡を送っており、このような異常な事件に対しては、異常な方法を用いる必要があるとのべている。

マリエットは請願が提出さるべき国王顧問会議に属している人であった。彼は一七六二年から六五年までの間、毎年一冊ずつ計四冊の「覚え書」を著わして、カラスの家族を弁護する。第四番目の「覚え書」において彼は、この事件が決して特殊な事件ではなく、いつ誰がカラスと同じ運命におちいるかも分らぬことを指摘している。

「行政、正義、人類、そしてすべての市民の安全についての利害が、ここには含まれている。……世の父親で家長

たる人が、ジャン・カラスを襲ったこの破滅の一部始終を聞いて、『わたしはそのような運命に対して保護されていない』と自問しないものがあるだろうか⁽⁸⁾」

つぎにエリ・ド・ボーモン。この人は三つの「覚え書」を著わす。第一の「覚え書」は一七六二年八月二十二日付となっており、あとの二つはともに一七六五年とだけ記されている。彼の主なる攻撃は「証言命令書」発行の非合法性について向けられた。加うるに彼は最初の「覚え書」を発行するに当り、フランスの著名な十五人の弁護士の名を集めることに成功したのであった。この方法は人びとの注目をひき、かつ信用を得るための巧妙な方法だったといへよう。

三人目のロワゾ・ド・モレオンもまた一七六二年に「覚え書」を出す。彼の役割は、検察側がもつとも主要な殺人の動機とした、マルク・アントワースの改宗の問題をつくことであつた。もしもマルク・アントワースの改宗が真実であれば、その改宗をうながし、彼の告白を聞いた神父は誰なのか。それが少しも明らかにされていない。「覚え書」はその点で判事たちに敵しい疑いの眼を向けるのであつた。

なおここでつけ加えておくが、ヴォルテールとはまったく仲違いしていたジャン・ジャック・ルソーも、おそらくカラス事件について知るところがあつたのであろう。彼は一七六二年十一月に書き、翌年三月に公刊した「パリ大司教クリストフ・ド・ボーモンへの手紙」⁽⁹⁾で、つぎのようにいっている。

「もしもフランスがあつた素朴で純粹で、神を恐れ人間を愛させるようにする、サヴォア助任司祭の宗教を行なつていたならば、……執行人たちに拷問された無実なカラスは、われわれの眼の前で、車の上で命を落すようなことはなかつたであらう」⁽¹¹⁾

以上のようなカラスの家族弁護の運動は、しかしながら決して順調に進んだわけではなかった。当時トルーズの高等法院は沈黙を守っていたが、ヴォルテールたちの請願になんとか邪魔をしようというものがいたのである。その一例をあげれば、ロンドンで発行された一七六二年六月十五日付のセント・ジェイムズ・クロニクル Saint James Chronicle に発表されたヴォルテールよりダランベールへの書簡と称するものであった。⁽¹²⁾ この書簡はヴォルテールの書いたオリジナルに、勝手に尾ひれが加えられてあり、作者およびこの事件をきわめて危険な方向に押し流すように、計算されて改作されてあった。当然、この新聞を手に入れたショワズール公 Duc de Choiseul は、十月九日付でヴォルテールに批難の手紙を書き、国王顧問会議以外の道を通って事件をくつがえそうと試みるのは、危険であると断定している。⁽¹³⁾ 手紙を受け取ったヴォルテールは大いに驚き、ただちにダランベールに手紙を書いて、自分の手紙のオリジナルを探し出し、それをショワズール公に見せて、他意ないことを証明してくれるようにと頼む。⁽¹⁴⁾ 幸いヴォルテールの書いたオリジナルは発見され、彼は安心することができたけれども、そうでなかったならば、顧問会議を通じて請願を国王に提出することすら、不可能となったかも知れなかったのである。

この間にもカラス夫人はゴベールとともに、「資料」や弁護士たちの「覚え書」をたづさえて、有力者の家を廻りながら、困難な運動を続けていた。それによって同情の動きが徐々に社交界にも伝わり、はじめのうちは一人の無実な男の処刑よりも、夜会や夜食の様子の方に関心が向いていた人々も、カラス夫人にたいして快よく家の扉を開いて、迎えるようになって行くのであった。

ちょうどその頃、パリの社交界で名高く、しかもフランスの代表的な武将であるリシュリュー元帥 Maréchal de Richelieu が、ジュネーヴ共和国を訪問することになった。ヴォルテールがこの機会を逃すはずがない。彼は

トウルネー Tournay に持っていた自分の館を、元師の滞在中そっくり提供し、自分もフランス領のフェルネーから迎えに出るのであった。⁽¹⁵⁾ かつての友人ヴォルテールが、その魅力によつて身の周りに集めた、にぎやかな人の群を見て、リシュリュ元師は心中ひそかに思うのであった。パリはヴォルテールを追放したことによつて、いかに多くを失なつたことかと。ヴォルテールはこの時、ピエールとドナを元師に紹介する。元来リシュリュは、新教徒には少しも同情のない人であった。彼はプロヴァンスの地方長官だった時、新教徒の牧師逮捕のために、一千エキュの賞金を出したことさえあつたのである。しかしながら、そのようなリシュリュも、ヴォルテールの演出によつてカラスの兄弟に会い、その物語を聞いた時には、大いに心を動かされてこういったと伝えられている。「ヴォルテール氏をのぞけば、わたしほどあなた方の事件に関心を持っているものはない。」このように本来同情しそゝもない人たちからも、同情と共鳴とを引き出して行くところに、ヴォルテールの才能と智略ぶりがうかがわれるのである。

ヴォルテールの働きかけは、フランスのみならず外国にも向けられた。そして彼の努力によつて例えば、英国からの寄付者のリストには、王妃やカンタベリー大僧正をはじめとして、十二人の公爵、二人の公爵夫人、その他貴族や高位聖職者の名前が数多く見られるのであった。

このようにカラス事件の啓蒙に全力を注いだけれども、同時にまた前途が必ずしも容易でないことを知り抜いていたヴォルテールは、慎重に歩みを進めることを忘れてはいなかった。その例をここにあげてみよう。

ジュネーヴの「秘密委員会」の内部では、つねに必ずしも意見が一致しているわけではなかった。カラス事件とシルヴァン事件 L'affaire Sirven ⁽¹⁶⁾ を結びつけるかどうかという問題などは、その代表的な場合である。ヴォル

テールの協力者のあるものは、この二つの事件を一括して扱う方が有利であると主張したのであったが、ヴォルテールはそれに反対であった。彼の意見では、そんなことをすればかえって、新教徒の間では宗教上の理由で子供を殺すことがよくあるのだという印象を、一般に与えるかも知れない。そうなるとカトリックの新教徒に対する偏見を、逆に強める恐れもあるというのであった。まずカラスを、そしてつぎにシルヴァンを。これが彼の主張であった。事実彼はカラス事件を片附けた後に、七年間にわたって、シルヴァン事件に恵念するであろう。

また彼は一七六二年の十二月、また翌年の一月には「寛容論」*Traité sur la Tolérance* を完成しているが、⁽¹⁷⁾その出版を遅らせている、その理由は、この作品によってトゥルーズの高等法院を下手に刺戟しては、後にのべるように、裁判の貴重な記録文書の写しを入手できなくなる、と心配していたからであった。

4 再審査への努力

ヴォルテールをはじめとして、カラス事件の再審査を望む人たちは、さまざまな努力を重ねつつも、いまや国王顧問会議が開かれるのを待ちこけていた。すでに大法官ギヨーム・ド・ラモワニオンはたび重なるヴォルテールらの頼みに押されて、この問題を国王の御前会議にかけると約束していたし、またその報告者としては、当時若くしてすでに輝やかしい才能を示しているルイ・ティール・ド・クロヌヌ *Louis Thiroux de Crosne* が指名されて、準備にとりかかっていたのあった。もう少し待ちさえすればよいのだ。エリ・ド・ボーモンが集めた十五人の署名も強い威力を発輝しつつあったし、さまざまな「覚え書」も他の文書ともに、英、独、オランダ語に訳され、出版されようとしていた。

ここで国王顧問會議 *Conseil du Roi* とはどんなものか少し触れておきたい。フランス革命前のいわゆるアンシャン・レジームと呼ばれた制度のもとにおいては、今日のような破毀裁判所 *cour de cassation* なるものは存在しなかった。しかしながら一六七〇年の法令により、被告人は国王顧問會議に請願して、會議はそれを請願委員 *maitres des requêtes de l'Hôtel du Roi* に判決させるといふ道が残されていたのである。すなわち当時は、裁判権が国王から高等法院に委譲されていたのであるが、同時にまた高等法院の力を抑制することができるよう、国王は国王顧問會議を開いて、必要に応じては高等法院の決定に干渉できるような制度があつたのである。また国王顧問會議は二つの段階より成っており、まづ国王と数人の重臣より成る「重臣會議」ともいふべきものが開かれて、問題を取り上げることを決定し、しかる後に顧問會議が開かれる仕組になつていた。そしてこの會議は大法官 *chancelier* を議長とし、國務顧問官 *Conseiller d'Etat* 土地貴族、法服貴族、國務卿 *Secrétaire d'Etat* 諸大臣、司教など、いわば宮廷と政府と教会の最高の地位にあるものの代表者の集まりで、カラス事件当時その構成員は、八十名を超えるといふかつてないほど多数の會議であつた。⁽¹⁾

さて国王顧問會議は期待に反して、一七六二年が暮れて翌年になつても、一向に開かれる様子になかつた。いささか焦つたヴォルテールは、友人たちにつきぎのように不満を洩らしている。

「数日前ある高等法院の判事が、カラス夫人の弁護士の一人に向つてこういつたそうです。『その請願は受け入れられないだろう。何故ならばフランスには、カラスの家族よりも数多くの司法官がいるからだ。』こんなことが信じられるでしょうか。」（ダランペール宛、一七六三年一月十二日）⁽²⁾

「一体カラス事件はもう報告されたのでしょうか。思うに請願を入れてもらうよりは、一人の人間を車裂きにする

る方が、はるかに容易なのですね……」(ダルジャンタル宛、二月二十五日)

この頃のヴォルテールの不安と焦立ちを示す面白い話が伝えられている。あるドイツの大領主で、世の出来事にとく孤独な暮しをしていた人がフェルネーにヴォルテールを訪ねたことがあった。サロンに通されて一礼した後、ヴォルテールは早速この貴族に尋ねたのであった。

「あなたは車裂きにされた哀れなカラスをどうお考えですか。」

「車裂きにされたというと……ああ、あれはきつと大悪党に違いありませんよ。」

ヴォルテールは急いで呼鈴を鳴らし、下男を呼んでいったのである。

「お客様の車は中庭にあるか。」

「はい、ございます。」

「それではすぐ馬をつなぐように。お発ちだ。」

この哀れなドイツの貴族は、何故ヴォルテールがこれほど不機嫌なのか分らず、立ち去らざるをえなかった。ジュネーヴに行ってこの話をすると、彼にはやつとヴォルテールの怒りの原因が分ったのであった。実をいうとこの貴族は、カラスというのをなにか盗賊の類だと、勝手に思いこんでいたのである。

一七六三年三月一日、ついに重臣会議が開かれた。ここでは六日後の三月七日に国王顧問会議が開かれ、マリエット弁護士の提出するカラスの家族のための請願が、取り上げられることが決定した。また顧問会議の前日には、カラス夫人が娘たちとゴベール・ラヴェスにつきそわれて、ヴェルサイユの鏡の間において、国王の前に紹介される手筈もとのえられた。いまや事件はパリと宮廷の注目するところとなったのである。

三月六日。ヴェルサイユを訪れたカラス夫人は、宮廷の人たちから慰めと励ましを受け、鏡の間で国王の通過を待ち受けていた。しかしながら、ちょうど国王が彼女に注意を向けるのに好都合な瞬間、従者の一人が床に転ぶということが起り、その方に注意がそらされている間に、彼女は国王の眼にとまる機会を失ってしまった。もつともヴォルテールの意見としては、カラス夫人が国王の眼にとまろうかとまるまいが、それは大して重要ではないと考えていたようである。彼から見れば、国王ルイ十五世はおよそ影響力のない、飾り物にすぎないというのであった。⁽⁴⁾

翌三月七日の朝になると、カラス夫人は正式に獄に入り、国王顧問会議が開かれた。そして満場一致をもって請願が取り上げられ、事件の再審査が決定されるとともににトゥルーズの高等法院に対しては、裁判書類の送付が命ぜられたのであった。以上のなりゆきについては、ゴベール・ラヴェスが書いたと思われる三月八日付の書簡が残っていて、この二日間の出来事を物語っている。⁽⁵⁾

この知らせを聞いたヴォルテールは大喜びだった。三月十二日、彼はムルトウ牧師に宛てて、つぎのような手紙を書いている。

「人間性の支配が宣言されつつあります。鏡の間で一同が心を動かされたということは、わたしの喜びと希望をさらに増大させるものです。これは民の声が神の声であるという、ひとつの機会なのです。この幸福な成功を聞いて、あなたはきつと喜びに涙されたと思います。」⁽⁶⁾

またダミラヴィル宛、三月十五日の書簡では、

「やはりこの地上には正義があります。人間性があります。人間は人びとがいうほど邪悪なものではありません。これはあなたの勝利の日ではありませんか。あなたは誰よりも、カラスの家族のために尽したのですから。」⁽⁷⁾

やがて王妃はカラス夫人と二人の娘たちに謁見をたまわった。宮廷中の人びとは、この悲しみに沈んだ婦人たちに、同情を惜しまなかったのである。だが彼女たちにとって、完全な名誉回復に達するためには、親切な慰めの言葉だけでは十分ではなかった。彼女たちにはいま、物質的な援助が必要であった。それに再審査が認められたというものの、まだようやく第一歩が踏み出されたにすぎない。ジャン・カラスが有罪か無罪かは、まだ疑問として残されているのである。この問題を解決するには、もう一度裁判をやり直さなければならず、そのためには訴訟記録をトゥルーズからパリへと、送らせなければならなかった。トゥルーズは大人しく書類の写しを送ってよこすであろうか。

ヴェルサイユの決定に対するトゥルーズの反応は、果して激しい形で現われた。トゥルーズの判事たちの考えはこうであった。「法の正義が王権から独立すべきは、第一の原則ではなかったか。長年の慣習によって高等法院のものであった權威が、いま国王から干渉を受けようとしているのだ。」そう判断した彼等は、ヴェルサイユの動きに対して非常な侮辱を感じるとともに、危機にひんした自分たちの威力を回復するために、結束して反抗すると同時に、教会にも支持を求めたのであった。この彼等の反抗ぶりは、つぎのような具体的な態度となって現われた。

第一に、カラス裁判の記録を要求したのに対するトゥルーズの高等法院の返事は、乱暴きわまるものであった。すなわち記録は非常に多量であるから、もしもカラス夫人がこれを欲するならば、それを写すための費用千五百リールを支払えというのであった。しかしそもそも裁判記録を要求したのは、国王顧問会議であって、カラス夫人ではない。トゥルーズの高等法院が国王の命令を行なうのに、何故カラス夫人は費用を払わなければならないのだろうか。高等法院のいい分は、このように実に非論理的であったが、それにもかかわらず彼等は、依然として書

類の送付を、一日のばしに遅らせるのであった。

第二に、高等法院はヴェルサイユに反抗するため、教会を味方につけたのであった。すなわちトゥルーズの大司教は高等法院の判事たちに対して、日曜日には彼等が自宅でミサを上げるといふ特権を許したのである。これはヴェルサイユの決定に対しては、何等具体的な反撃の力とはならなかったが、しかし高等法院と教会との同盟関係を、外に誇示するものではあった。もっとも後になると大司教は、自分のやったことがあまり賢明でなかったと気がつき、自分の立場を正当化しようとして、内務大臣サン＝フロランタン Saint-Florentin からこの件につき賛成をとりつけようとする。この内務大臣はかつて事件当時は、町役人ダヴィドを励ますような手紙を書くほどの人であったが、さすがの彼も大司教のこの要請を拒絶する。これをもってしても、もはや時流が向きを変えていたことが分るのであろう。

このようなわけで、裁判記録の写しは仲々パリに到着しなかったのだが、それにはもうひとつの原因があった。それはこの文書をパリへ運ぶ役目を負ったルイ・カラスである。このカラス家の三男は、家族の中でただ一人のカトリックであったが、事件の当時からそれ以後の彼の行動は、矛盾にみちたものであった。父親と教会との間に入つて、自分の家族の破滅をもたらす連中の手先のような役割を果していた彼は、ナネットが聖母訪問会の修道院に入れられると、しばしばそこを訪れるのであった。そこで彼の動静は修道尼アンヌ・ジュリー・フレーズに知られ、ナネットがパリに行った後になつても、この修道尼の書簡によつて、時おりパリに報告されたのである。それによるとルイの行動について、不可解な事実が出てくるのである。たとえば一七六三年六月十三日付のアンヌ・ジュリーからの書簡によれば、ルイはその翌日にはパリに出発するはずになつていた。ところが八月三日付の書簡には、

つぎのような文句が見出されるのである。

「ご存知のように、わたしが決して信用したことがなかったあなたのお兄さんは、二ヶ月近く前にやってきて、その翌日パリへ発つのだと告げました。……（しかし）彼はほんの数日前に発つたばかりなのです。したがって訴訟記録も二ヶ月前にはパリに着いていると、彼がうけあつていたのですが、これまた同じことです。……」

ルイがパリへの出発を故意に遅らせたのは、彼自身の考えからやったのか、あるいはまた誰かが彼に命令し、彼をあやつっていたのか。それは分らない。いづれにせよ遅れに遅れていた記録文書も、ようやくパリに送られることになったのであった。

ところでこの間にヴォルテールは、ひとつの著作を書き上げて、出版の機会をうかがっていた。それは彼の作品の中でいままなお読むに値するもののひとつである「寛容論」⁽⁷⁾ *Traité sur la Tolérance* である。この作品は一口にいえば、キリスト教の原理の適用を誤まったことから生じた不寛容に対する長い抗議であり、ヴォルテールは不寛容の歴史をローマ時代のキリスト教にまでさかのぼって追求し、後世になって行なわれるようになった迫害や不寛容は、すべて本来のキリスト教の精神とは、なんの関係もなく生じたものであることを、明らかにしようとしている。彼はこの作品を一七六二年あるいは翌年の一月のうちには、完成しているようである。しかしかし彼は、さきのべた裁判記録の写しを確実に手に入れて、もはやなにも恐れる必要がなくなる時まで、その出版を延期したのであった。すでに一七六二年十二月六日、彼はこの作品を予告してこういつている。

「カラスの家族と白色苦業会員のことについて、なにかが世に出るといふ噂があります。しかし再審査の判決が下るまで待ちましょう。」⁽⁹⁾

そして翌年の一月二十四年になると、彼は例によつてとぼけたことをいつている。

「間もなく現われる寛容についての小さな作品を、聖職者でない人が書いたものだというのは、慎しんで下さい。それはある司祭の手になるものなのです。そこにはぞつとするような箇所と、吹き出してしまふような箇所があります。というのは有難いことに、不寛容は恐るべきであると同時に、馬麗げたことだからです。」⁽¹⁰⁾

「寛容論」は一七六三年十一月にジュネーヴで出版され、フランスに密輸入されて、百科全書派の人たちや、大臣たちに配布された。しかしヴォルテールは出版を前にしてこの作品の写しを、すでにポンパドゥール夫人、シヨワズール公、プロシヤのフリードリヒ二世などに送っていた。ヴォルテールからこの作品を受け取った人たちは、みなそれを読んで、個人的には賛意を表したけれども、自分の意見を外に発表するのは、注意深くさしひかえるのであった。とりわけ彼の旧友ベルニス枢機卿に至つては、この作品があまりにも重要かつ微妙な問題に触れているといつので、送られるのを断つたほどであった。

この反応はヴォルテールにとつて、いささか予想外であり、また理解し難いものであった。彼は自分の作品の不運を嘆いたのであったが、しかし「寛容論」はとにかく写され、人びとに配布され、英国、オランダをはじめヨーロッパの各国に流れて行くのであった。意識のゆるやかな動きが、はつきりとした行動へと變つて行くには、やはり時が必要だったのである。

5 名譽回復

遅れていた裁判記録の写しは、八月になつてやつとパリに着いた。事件はもう一度はじめから調べ直され、十ヶ

月たった六月四日に国王顧問會議が召集された結果、いままでカラスの家族に対して下されたすべての判決を無効とする、原判破毀の布告が発せられた。すなわちこの布告によって、一七六一年十月二十七日にトゥルーズの市役所が下した最初の判決と、翌二年三月九日に高等法院が下したジャン・カラス車裂きの判決、および三月十六日に他の被告たちに下った判決の三つの判決は、無効を宣せられたのである。かくしてようやく事件は、国王直属の請願委員たちの手にゆだねられることになったのである。請願委員は十四人の地方長官を含む四十名で、いづれも当時の法曹界の代表的な人たちであったが、その中から報告者に任命されたのは、知性によって広く人びとから信頼されていたデュプレクス・ド・バカンクール Duplex de Bacquencourt であつた。

請願委員たちによって行なわれた事件の再審査においては、今まで乱暴にも抑えられていた被告たちの声にも耳が傾けられたし、ジャン・カラスに有利な証言も取り上げられたことはいままでもない。いまやこの裁判にはフランスのみならず、ヨーロッパ中の関心が集まり、もしもこの裁判を誤るならば、それこそ「ヨーロッパに対する侮辱」とならんばかりの状況であつた。かつて被告たちを裁いたトゥルーズの高等法院が、今度は逆に裁かれる立場に廻つたのである。

カラスの家族とそれを援助する人たちは、しばしばヴォルテールの友人ダルジャンタルの家に集まり、弁護の準備や打ち合せに忙がしかつた。前の裁判では取り上げられなかつた証言が集められ、さらに進んで証言を行なおうという人も新たに現れた。たとえばマルク・アンワヌがクリスマスにトゥルーズの教会で告白をして、出てくるのを見たという前回の証言に対して、ある司祭がその事実を否定するような証言を行なつた。すなわちこの司祭はブラサックという町で、その同じ日にマルク・アントワヌを見たというのであつた。これはその一例であるが、

こういつたようにもしも取り上げられていたならば、いかに盲目的な法廷といえども、ジャン・カラスを無罪にした
だろうと思われる証拠が、いくつか出てきたのである。とりわけゴベールの熱心な協力により、弁護士のエリ・ド
・ボーモンやマリエットの手を通して「覚え書」が綴られたことはいうまでもない。⁽¹⁾

さて最終判決も近づいた一七六五年二月二十八日、被告たちは全員、パリのコンシエルジュ La Concierge の
の牢獄に入った。ただしこのたびは何等ひどい扱いは受けず、外部のものとの面会も自由であったので、たちまち
牢獄は著名人や社交界の人たちの訪問を受け、あたかもサロンのような状態を呈した。一方四十名の請願委員たち
は六回にわたって法廷を開き、毎回の会議は四時間におよび、最終の第六回目は、実に八時間にわたる長い会議を
続けた。そして三年前にジャン・カラス死刑の判決が下ったのと丁度同じ日、一七六五年三月九日、全員一致で被
告一同の無罪釈放とジャン・カラスの名誉回復、および被告たちのトゥルーズにおける逮捕、投獄の記録を、過去
にさかのぼって抹殺すべしとの命令を含む最終判決を下したのであった。⁽²⁾

三年あまりにわたる裁判も、こうしてようやく終りを告げ、カラスの家族の名誉は回復されたのであるが、ここ
にもうひとつの問題が残った。それはこの事件によってカラス家の蒙った損害を、どう償うかということであっ
た。それからまた彼等は今後、どうやって生きて行けばよいのかも、全然当てがなかったのである。ジャン・カラ
スの処刑後、約八万リーヴルと評価された彼の財産はその三分の二を凍結され、その上に重い罰金が科せられたの
であった。またカラス夫人の持参金や、子供たちの相続は差押えられ、家族が獄中に居る間に空になった店は略奪
され、帳簿や記録は破り棄てられた。それだけではない。幸いにして難を免れた二人の娘の生活を支えるために
は、借金をしなければならなかったし、さらに高等法院の判決が下った後もトゥルーズの市役所は追討をかけ、

五ヶ月の間牢獄の番をした二十名の兵士の費用を、カラスの家族が払えと請求してきたのである。彼等はすでに以上のような惨めな状態に落ちこんでいたのであったが、その上今度の三年間にわたる訴訟や旅費についてだけでも五万リーヴルという巨額の費用がかかっている。これに対してヴォルテールをはじめ、ヨーロッパ各国から送られた寄附があつたとはいえ、とてもそれだけでは不十分だつた。

ヴォルテールによれば、カラスの家族が受けた損害は、本来トゥルーズの町役人ダヴィド、および高等法院が負うべきものであつた。しかしながら高等法院は、請願委員の最終判決に従うどころか、逆に以前の自分たちの判決を再確認するという、反抗の姿勢を示している。やむを得ずカラス夫人の味方たちは、国王に援助を願ひ出たのであつた。ちょうどこの頃ヴォルテールは、三月二十七日のダミラヴィル宛の書簡でつぎのようにいつている。

「王妃は彼女の（カラス夫人の）健康を祝して乾杯をされた。しかし彼女には飲むに必要なものを与えられなかつた。」^(a)

幸い法曹界に大きな勢力を持ち、当時副大法官 Vice-Chancelier の地位にあつたルネ・シャルル・ド・モプー René-Charles de Maupeou ⁽⁴⁾ がこの願ひを国王に取次ぎ、国王から三万六千リーヴルの金額が一同に与えられた。すなわちこれを分配してカラス夫人に一万二千リーヴル、二人の娘にそれぞれ六千リーヴル、ピエールとジャンヌ・ヴィギエにそれぞれ三千リーヴル、そして残りの六千リーヴルは旅費と訴訟費用という内容であつた。

ところでこういつた動きに、不愉快を感じている人があつた。それは国王顧問会議のメンバーでもあつた内務大臣サン・フロランタン Saint-Florentin, Ministre de l'Intérieur である。そもそもこの人は事件当時、トゥルーズの町役人ダヴィドに手紙を書き、その職務に忠実なことを賞讃したほどの人であり、宗教的偏見の強い人であ

つたから、カラスの名譽回復をにがにがしく思っていたところだった。それは彼の今後の策動によっても、理解されるであろう。彼は今回の失敗は町役人ダヴィドの責任と考え、一七六五年二月二十五日にはダヴィドを免職にし、彼から貴族の称号と紋章とを剥奪している。けれども同時に彼は、会計検査院長 *Contrôleur Général* に手紙を書いて、カラス家の中でカトリックのルイにだけ援助のないことを指摘し、ラングドックではパリの判決を知った新教徒たちが、ますます大胆になって、集会を開いたり、自分たちの教会を建てようとする動きを示したりしていることを報じている。サン・フロランタンの計略は成功した。ルイはピエールと同額にあたる千エキユを与えられたのである。⁽⁵⁾

さて国王および他の人たちからの援助にもかかわらず、破産状態の上に莫大な借金を負いこんだカラス夫人は、きわめて不安な日々を送っていた。そこで考えられたのが、当時流行の画家カルモンテル *Carmontel* に頼んでカラスの家族の版画を作ってもらい、それを売ることであった。この版画はその後現在に至るまで、カラス事件を世に伝えるイメージとして名高いもので、しばしば歴史書や文学史書の中に複製されているものである。その構図は、牢獄の中でカラス夫と二人の娘およびジャンヌが、ゴベルの「覚え書」の朗読を聞いており、そのかたわらからピエールが、身を乗出しているところを表わしている。当時の人の噂では、これらの人の顔立ちとは、本人によく似ているとのことであった。⁽⁶⁾ この版画は国王の認可を得て、一枚一エキユ⁽⁷⁾で予約をとりはじめた。予約者はフランスはもとよりヨーロッパ各国に及び、その中にはプロシヤ、デンマーク、ポーランドなどの国王をはじめ、新教徒のドイツ諸侯やシヨワズール公のような、身分の高い人の名前も数多く見うけられた。ヴォルテールもこの計画に大喜びで、十二枚を注文している。彼はこの版画が気に入ったようで、その後もつねにベッドの横の壁

にかけ、最後にパリへ来て死ぬ時にも、版画は病床の彼から見える位置にかけられてあったという。

版画のさいききは上々であった。この有名な事件の劇的な人物の肖像画見たさに、予約の申込みは続々と集まり、カラスの家族の経済には安定の希望が出てきた。ところがこの時、版画の与える宣伝効果を憂慮しはじめた警察は、突然その予約と販売の禁止を命令してきた。その理由はつぎのようなものであった。

- 一、予約をもっとも積極的に推進するものが、パリから追放された人物、つまりヴォルテールであること。
- 一、この版画はトゥルーズの高等法院に対する侮辱であること。
- 一、利益を得るのが新教徒であること。

これに対してただちに、禁止を解こうとする努力がなされたことはいうまでもない。しかし禁止令の後には内務大臣サン＝フロランタンがいた。彼はこの禁止を解除するのを七ヶ月以上も遅らせ、その間版画の販売を不可能にしてしまった。結局最後にはまた許可が下りるのであったが、しかし飽きやすいパリジャンの興味は、その時にはもう薄らぎ、以後の予約はいちじるしく減ってしまった。

このような逆境にあっても挫けぬヴォルテールは、金持や身分の高い人びとに手紙を送って、カラスの家族のために援助を乞うのであった。これに応えて例えばロシアのカテリーナ大帝は、五千リーヴルをカラス夫人に送ったといわれている。この頃のヴォルテールの態度は、同時代人や後世の人からは、身分の高い人に対するへつらいであるとして、批難されている。たしかにそういう面もあったであろう。本来ヴォルテールという人には、そういう欠点があったようである。が同時にまた、時代が一七六〇年代だったことも、考えてやってよいと思う。

カラス夫人はその後も借金を負って、貧しい生活を続けるが、フランス革命が起ると、革命暦第二年の雨月二十

三日（一七九四年三月十一日）、市民ベザール Bézard の提案により、国民公会 La Convention Nationale は、ジャン・カラスのすべての負債を国庫が負担する決議を行ない、ようやく彼女は救われたのであった。

6 その後の人びと

最後にカラス事件の主役をつとめた人たちの、その後をたどってみよう。

まず町役人ダヴィド・ド・ボードリグは、すでにのべたごとく、カラスの名誉回復の判決が下る直前に、その職を免ぜられていた。高慢で自信の強い彼にとって、職を追われたことは激しいショックだったようである。その後、彼については、当時の新聞の記事がのっている。⁽¹⁾それによるとダヴィドは免職になった後、さらに自分に対して訴訟が起されるのではないかと恐れ、心配のあまり完全に心を乱してしまう。故郷の町に帰って妻の看護を受け、家を抜け出そうとしては連れ戻され、自殺をはかって窓から飛び降りては失敗して、家人に監視されて生きるという惨めな有様であった。以上が新聞の伝えるところであるが、その後彼はもう一度窓から飛び降りて、ついに自殺をとげたといわれている。かくして彼は、後世に出た数多くの作品や研究の中で、つねに無智と虚栄と傲慢のシンボルとして、その名を留めることになったのである。

カラス夫人は事件が片附くと、パリのポワソニエール街 rue Poissonnière 九番地に、二人の娘およびゴベール・ラヴェスとともに住む。一七七〇年七月、⁽²⁾彼女はゴベールにつきそわれて、フェルネーへ旅をすることになった。彼女はここではじめてヴォルテールに会い、感謝の念を新たにし、同時にジュネーヴに住むピエールとドナにも会おうというわけであった。カラス夫人とヴォルテールとのこの対面について、目撃者や第三者による記録は、残念な

がらなにも残っていない。しかしおそらくは喜びと感謝の対面であつたろうことは、容易に想像されるのである。⁽³⁾
その後二人は、もう一度パリで会う機会があつた。それは一七七八年、ヴォルテールが死ぬ直前にパリへ凱旋した時である。この時パリの民衆はヴォルテールに「哲学者万才!」⁽⁴⁾とはいわずに、「カラスの擁護者万才!」と叫んだことは有名な話である。

フランス革命の世となつて、一七九一年七月二十一日、国民議会 L'Assemblée Nationale は、ヴォルテールの遺体をパンテオンに移すため、盛大な儀式をとり行なつた。正面に飾られたこの哲学者の胸像に、ヴィレット夫人 Mme. Villette が月桂冠をかぶせる時、彼女のかたわらには、つましくひかえて涙を流している一人の老婦人があつた。これがカラス夫人だったのである。その晩、国立劇場 Théâtre Français では、マリジョゼフ・シエニエ Marie-Joseph Chénier の「カラス」、または判官学校「Calas, ou l'Ecole des Juges」⁽⁴⁾が上演されたのであつた。カラス夫人はその後数ヶ月で死んだ。一七九二年四月二十九日。八十二才であつた。⁽⁵⁾

次男のピエールは、名譽回復後間もなくジュネーヴに行き、そこで商売をする。彼は一七七二年に結婚し、一七九〇年九月二十日、五七才で死んだ。

三男のルイはカトリックであつたため、事件後も家族と差別されていたが、さきのにべた如くサン・フロランタンのお陰で多額の金を手に入れ、英国へ渡つた。彼はここでは不名譽な人間として扱われずにすみ、法律を学んだといわれている。フランスへ帰つて来てから、彼はカラス夫人とも和解する。母親カラス夫人にしてみれば、やはりわが子が可愛いかったのであろう。その後彼は一七九二年六月十八日になると、立法議会 L'Assemblée Legislative へ金の無心を願ひ出て、不成功に終つてゐる。けれども革命暦第二年の霧月二十九日(一七九三年十一月十九

日、国民公会の決議によつて、ジャン・カラスが処刑されたトゥルーズのサン・ジュルジュ広場に、教会を壊した石でもつてカラスのための記念柱を建てることが決つた時、ルイはカラスの家族として母親や妹とともに、国民公会宛に感謝の手紙を書いている。彼は最後まで気の弱い、定見のない男だったのである。

四男のドナはずつとジュネーヴに住み、結婚をせず、一七七六年に死んでゐる。

つぎに姉のロジーヌ。彼女は母親といつしよに住んでついに結婚しなかつた。彼女がいつまで生きていたか不明である。

妹のナネットはその後も、アンヌ・レジユ修道尼が死ぬまで、友情あふれる文通を続け、一七六七年二月二十五日、パリのオランダ大使館の牧師で、スイス人のデュヴォアザン Duvoisin という人の妻となる。二人の間には子供が三人生れるが、そのうち二人は死んでしまふ。彼女は一七八〇年に夫に死なれ、それ以後はまた母親の家で暮すようになる。ナネットが死んだのは一八二〇年のことであつた。

ゴベル・ラヴェスは最初の数年間、カラス夫人といつしよに住み、彼女の息子代りをつとめた後、しばらくの間英国に渡り、フランスに帰つてから商業で身を立てる。彼は一時インド会社の代理人に選ばれたこともあつたが、フランスに戻つて一七八六年に死ぬ。

終りに女中のジャンヌ・ヴィギエ。彼女は最終判決の前にパリへやつて来て、最後までカラス家のために尽したが、事件が終つてみればパリに暮すには貧しすぎた。そこで彼女はカルモンテルの版画にその姿を残しただけで、またトゥルーズに帰つた。しかし彼女については後日談がある。最終判決にあくまで不満なトゥルーズでは、一七六七年になるとつぎのような噂が広まつて、それがパリまで聞えてきたのである。

の臨終の告白によれば、彼女はこの四十年間カラス家をスパイしていたこと、また改宗者を処刑する新教徒の恐るべき習慣のこと、さらに彼女はマルク・アントワーヌ殺害の場に居合わせたことなどを、証言したというのである。だがしかし、この噂もデマにすぎないことが明らかになった。というのはジャンヌはまだ死んでいなかったのである。そして彼女は一七六七年四月四日、法的な手続きをふんだ陳述を行ない、すべてを否定したのであった。⁽¹⁰⁾ この彼女の陳述は彼女の死後、その告白を受けた神父によつても明らかにされている。われわれはここにトゥルーズの執拗な悪意とともに、ジャンヌの強い正義感を見ることができるのである。

以上いささかくどいと思われるほどに、カラス事件の主役たちの後を追つてみた。ここでわれわれに分ることは、彼等がこのような波瀾にとんだ事件にまきこまれながらも、その後はまたなんの異常な生涯をも送らずにきわめて平凡な人間として生きて行ったことである。ちょうど事件前の彼等の生活がそうであつたように……。

嵐がひとたび過ぎ去つてしまうと、人びとはまたもそのような生活を続けて行く。今日トゥルーズの市役所、サン・テチエンヌの教会は、なおありし日の面影をとどめ、ジャン・カラスの処刑台を噴水に置きかえたサン・ジョルジュ広場も、かつてのただずまいをうかがうに足るといえよう。だがフィラチエ街十六番地（現在は六十番地）の家は、一八三五年に加えられた改修により、昔ながらの様子を認めるのは、やや困難なようである。

1

(1) 事件の経過については「学習院大学文学部研究年報第十輯」の拙稿「カラス事件」参照。

(2) Voltaire's Correspondance, éd. by Th. Besterman, vol 48, No. 9583.
なお以下この「ヴォルテール書簡全集」を V. C. と略す。

- (3) V. C., vol 48. No. 9588.
 - (4) V. C., vol 48. No. 9587.
 - (5) V. C., vol 48. No. 9590.
- なおその他 No. 9596, No. 9604 を参照。

- (6) V. C., vol 48. No. 9590.
- (7) V. C., vol 48. No. 9604.
- (8) V. C., vol 57, No. 11580.

しかしヴォルテールに好意的でない人は、彼の事件介入に対してさまざまな推測を立てている。例えばシャセーニユによれば、ヴォルテールにとってカラスなどはどうでもよいのであって、白色苦業会に対する彼の憎悪が、彼の事件介入の動機だとしているが、これはなかなか意地悪なと思われる。

Cf. Marc Chassaing, *L'affaire Calas*, 1929, P. 279.

- (9) V. C., vol 48. No. 9608.
- (10) V. C., vol 59. No. 11580.
- (11) V. C., vol 48. No. 9647.
- (12) V. C., vol 48. No. 9646.
- (13) 「荒野の教会」のこゝには前出拙稿の第六章参照。
- (14) Extrait d'une lettre de la dame veuve Calas du 15 juin 1762. dans *Mélanges de Voltaire*, Bibliothèque de la Pléiade. P. 525~528. (以下 *Mélanges* 以下ナ)
- (15) Lettre à D'Argental du 14 juillet, 1762. V. C., vol 49. No. 9777.
- (16) Lettre de Marquise de Pompadour to Charles, duc de Fitzjames, V. C., vol. 49, No. 9864.

- (2) Lettre de Donat Calas à la Dame veuve Calas, sa mère, dans *Mélanges* P, 528~534.
- (3) V. C., vol. 49, No. 9755 (le 5, juillet) et No. 9777 (le 14, juillet)
- (4) V. C., vol. 49, No. 9761.
- (5) Edna Nixon, *Voltaire and the Calas Case*, 1961, P. 146.
- (6) 七月二十六日、ヴォルテールはオデイムール宛につきのようについている。
「当地にはビエール・カラスがおります。わたしは彼を四時間尋ねました。わたしは戦慄し、涙が流れます。しかし行動しなければなりません。」
 Cf. V. C., vol. 49, No. 9796.
- (7) V. C., vol. 51, No. 10149.
- (8) この書簡は資料としてロケットルの研究の巻末に収められている。
 Athanase Coquerel, *Jean Calas et sa famille*, 2^eéd., 1873, P. 381~428.
- (9) ラヴェス氏がなぜ息子だけを引き離そうとするのか。ピーンによれば、それはラヴェス家とカラス家の階級の違いのためだったという。いわばラヴェス家は体制に組みこまれた「安全な新教徒」であり、カラス家は「危険な新教徒」の商人であったという。
 Cf. Bien, *Calas affair*, chap 3, P. 55~56.
- これに対しヴォルテールは八月四日、ラヴェス氏に協力を求める手紙を書いている。興味あることに、ここで彼は息子のラヴェスがまだ協力していないような書きぶりを示している。
 Cf. V. C., vol. 49, No. 9822.
- (10) V. C., vol. 49, No. 9777.

3

- (1) V. C., vol. 49, No. 9766 (le 9, juillet)
- (2) Pièces originales concernant la mort des sieurs Calas et le jugement rendu à Toulouse.

ヴォルテールとカラス事件 (小林)

ヴォルテールがこの作品について最初に語るのは、一七六二年七月五日付ダルジャンタル宛の書簡においてである。

- (3) Mémoire de Donat Calas pour son père, sa mère et son frère, dans *Mélanges* P. 536~546.
- (4) Déclaration de Pierre Calas, dans *Mélanges* P. 546~552.
- (5) Histoire d'Elizabeth Canning et des Calas, dans *Mélanges* P. 553~562.
- (6) *Mélanges* P. 554.
- (7) V. C., vol. 49, No. 9703.
この書簡は「コクレル」ニクソンをはじめ多くの研究書に引用されているが、いづれもエリ・ド・ボーン宛となつてゐる。しかし「ニクスターマン」が註と断つてゐる如く、「マリヤット宛」である。
Cf. Coquerel, *op. cit.*, P. 229. Nixon, *op. cit.*, P. 156.
- (8) .
- (9) Lettre à Christophe de Beaumont, archevêque de Paris.
- (10) 「キーツ」第四巻である信仰告白「ルノー自身」の宗教観を説いたもの。
- (11) *Oeuvres complètes de J.-J. Rousseau*, éd. Hachette, t. 3, P. 99~100.
- (12) The falsified English version of Voltaire's letter to Alembert of 27 March 1762.
V. C., vol 48, appendix 137.
- (13) V. C., vol 50, No. 9944.
- (14) V. C., vol 50, No. 9937. (Je 12, oct, 1762)
- (15) リンネーの「シホネー」着は「一七六二年十月四日付ヴォルテールの書簡」現存。 Cf. V. C., vol 50, No. 9928.
- (16) この事件については前出拙稿第七章参照。
- (17) この作品の予告および完成を告げるヴォルテールの書簡として
V. C., vol 50, No. 10013. (Je 6, déc, 1762)
V. C., vol 51, No. 10129. (Je 24, jan, 1763)

- (1) 國王顧問會議は本来、中世における重要國務を諮問するための「王會」*curia regis* が次第に發達、組織化されてきたもので、一七、一八世紀を通じて、形、人数が一定だったわけではない。ここではカラス事件理解に必要な形で説明したのである。詳しくは野田良之著「フランス法概論」上巻(2) 有斐閣 昭和三十年
- (2) V. C., vol. 51, No. 10090.
- (3) V. C., vol. 51, No. 10229.
- (4) Coquerel, op. cit., P. 241, note, 4.
- (5) Coquerel, op. cit., P. 240.
- (6) V. C., vol. 51, No. 10273.
- (7) V. C., vol. 51, No. 10289.
- (8) Coquerel, op. cit., P. 386~387.
- (9) V. C., vol. 51, No. 10013.
- (10) V. C., vol. 51, No. 10129.

- (1) 再審査において新たな証拠や証言が提出されたことは一応注目すべきである。何故ならば、カラス有罪説をとる人は、しばしば再審査が世論の圧力に左右されたかの如く考えるからである。そのような判断は事実を誤るものといえよう。例えばシャセーニュなどはその典型である。Classique, op. cit. P. 281.
- (2) この歴史的記録のオリジナルは、現在ジュネーヴの Institut Voltaire に保存されている。
- (3) V. C., vol. 57, No. 11660.
- (4) 彼は後一七六八年には大法官になる。高等法院と争った有名な大法官モプーは、彼の息子である。
- (5) エキュは三リーヴル。
- (6) Grimme, Correspondance litteraire, le 15, avril, 1765.

(7) このエキュは六リーヴル。十八世紀には三リーヴルと六リーヴルの、二種のエキュがあった。

6

(1) *Affiches de Province*, n. 49 du 9 octobre 1765. この記事はコクレルに収録されている。

Cf. *Coquerel op. cit.* P. 279.

(2) ニクソンによれば一七七〇年九月とある。 Cf. *Nixon, op. cit.* P. 206. しかしこれは誤りで一七七〇年七月七日付「ダランベール宛の書簡」には、その前日ヴォルテールがカラス夫人に会ったことを短く報じている。

Cf. *V. C.*, vol. 76, No. 15480.

(3) コクレルおよびニクソンによれば、ヴォルテールはダランベール宛につきのように対面の模様を報告したといつて
5th.

「この善良な徳高き母親は、先日わたしに会いにやってきました。わたしは子供のように涙を流した。」

Cf. *Coquerel, op. cit.* P. 272, *Nixon, op. cit.* 206.

しかしこの手紙の日付は不明であり、V. C. の中にはこれに当る手紙は見当らない。

(4) 初演はこの年の七月六日。出版は一七九三年である。

(5) この年令は彼女の死の翌日行なわれた埋葬の証明書による。しかし彼女の年令には二つの説がある。前出拙稿第二章、註4。

(6) この記念柱は実際には建たなかった。

(7) ドナの死亡の日は、コクレルによれば四月十日、クୀテによれば九月十日である。

Cf. *Coquerel, op. cit.* P. 276.

Contet, Jean Calas roué vif et innocent, 1933, P. 242.

これがたんなる誤植であるか否かは不明であるが、コクレルの研究を調べた限りにおいては、年代などの数字に關して誤りが非常に多いことを指摘しておきたい。

(8) クୀテは彼女が恐らく一八二〇年より少し前に死んだであろうといっている。

Cf. Coutet, op. cit. P. 244.

(9) ニクソンによれば、この噂は最終判決の前に流れたことになっているが、これは誤りで、ジャンヌは一七六四年六月にトゥルーズを発ってパリへ来ている。したがって彼女についての噂を流すことは不可能なはずである。

(10) Déclaration de Jeanne Vigière.